

膿皮症 Pyoderma

細菌によりひきおこされる皮膚の感染症を膿皮症といいます。ホルモン異常や、他の皮膚炎、寄生虫、アレルギー、外傷、熱傷などに続発することもあり、多くの細菌が原因菌として関与しています。

特に犬ではその発生率が非常に高い皮膚病でもあります。猫での発症は他の皮膚病に続発することがほとんどです。特に成長期にある幼弱な動物、日本の高温多湿な夏場環境は注意が必要です。

膿皮症は大きくわけて皮膚の表面にできる表在性膿皮症、やや浅いところまでできる浅在性膿皮症、それと深いところまでできる深在性膿皮症の3つに分類することができます。

原因

細菌による皮膚感染が原因で、様々な細菌が原因菌として考えられますが、最も一般的に多く見られる細菌は *Staphylococcus intermedius* と呼ばれる細菌です。

症状

症状としては、皮膚炎、毛包炎、丘疹、膿疱、痒みなどがおこり、時には発熱や痛みを伴うこともあります。また膿皮症が起こっている周囲に脱毛が起こることもありますし、長期になると色素沈着が起こることもあります。

深在性膿皮症は二次感染による合併症で死亡することもあるので皮膚病だからといって甘く見てはいけません。



診断法

通常は視診と症状から仮診断します。症状が長期間みられる場合には、細菌培養、皮膚の病理組織検査を行う必要があります。

また、再発性の膿皮症の場合には基礎疾患が存在している可能性があるため、ノミアレルギー性皮膚炎、アトピー、食餌性アレルギー、甲状腺機能低下症、副腎皮質機能亢進症、糖尿病、その他ホルモン疾患、皮膚寄生虫感染症などについても検査する必要があるでしょう。

治療法

仮診断により診断的治療ということで、ある種の抗生物質により治療します。通常軽度の表在性膿皮症で1~3週間、深在性膿皮症で1~3ヶ月の治療が必要です。

その他、消毒、薬用シャンプーによる洗浄などを行います。稀ですが外科的処置を行うこともあります。

自宅での看護法

獣医師の指事にしたいがいケアしてあげてください。処方されたお薬は確実に投与し、勝手に休薬をしないようにしなければなりません。特にこの病気は見た目ではよくなったように見えても再発をくり返すことがあります。最低でも症状がなくなっても1週間はお薬を飲ませることが必要です。

お家では獣医師から処方される薬用シャンプーを用いてケアしてあげることが治療の助けとなります。

予防法

定期的なきちんとしたシャンプー(必ず動物用のシャンプーを使って下さい。できれば薬用シャンプーを用いられることお勧めします)や一次疾患の治療は予防になります。また皮膚を清潔に保つためには毎日のブラッシングも有効です。

メモ

ゴールデン・レトリバーやシェットランド・シープドックなどの毛の長い犬種は皮膚の表面にできる表在性膿皮症が、パグやダルメシアンなど毛の短い短毛種には皮膚の深いところまでできる深在性膿皮症が起こりやすいことが分かっています。またジャーマン・シェパード種は後足に難治性(非常に治りにくい)深在性膿皮症が起こることがあります。



[広告] ▲上記QRコードで携帯から簡単アクセス可能..